（逓信省認可）

掲載要目

文藝 汐干狩

立花屋蒸氏脚本 堤朝露

第八十二号

一冊五錢（別製八錢）

明治廿年四月五日發兌

小説及音樂史

韻文二種

いらつめ第八十二號目次（明治廿四年四月五日）

無名小說（五）…………………神田一女生
汐干狩（懸賞文選）
未練…………………………香岡女史
寂滅（韵文）………………かをた
浮世（韵文）………………茅海散士
恨長柄堤朝露（讀切脚本）……立花昆蔭
日本音樂史稿（八）…………琹緒子
つれ〳〵（寄書）……………犬口

いらつめ定價

並製
一部金五錢、府外郵税別に五厘
六部金二拾七錢、府外郵税別に三錢
拾二部金五拾四錢、府外郵税別に六錢
二拾四部金一圓、府外郵税別に拾二錢

別製（別製は最良の洋紙に印刷し且毎号内外國景色、風俗、花卉、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娯樂に供します。）
一部金八錢、府外郵税別に五厘
六部金四拾七錢、府外郵税別に三錢
二拾四部金一圓八拾八錢、府外郵税別に拾二錢

◎毎月二十日兩回發兌◎府内無郵税◎金子御差し送りの手續きは小爲替ならけ排渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し受取人の名内よ（神田平永町九番地成美社）と御記入の事◎郵券代用ハ五厘切手で一割増の事◎見本ハ五厘切手で並製五錢五厘別製八錢五厘御取の上差し上げます◎廣告料一行八錢割引無し

從第七十八號至第八十二號五部 版權所有
明治廿四年四月四日印刷　明治廿四年四月五日出版
發行人　山田武太郎　東京市神田區平永町九番地居住
印刷人　山本宗之助　東京市本郷區駒込西片町十番地居住
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

○懸賞文芸新題

○第四十二回題（唱歌文章）
右　日章旗…………………四月十日〆切
○第四十三回題（何でもよし）
右　花の色…………………四月廿日〆切
○第四十四回題（唱歌文章）
右　風鈴を詠ふ……………五月十日〆切
○第四十五回題（唱歌文章）
右　渉きぬ…………………五月廿日〆切
○第四十六回題（何でもよし）
右　愛兒の夢………………六月十日〆切
○第四十七回題（何でもよし）
右　首むすめ………………六月廿日〆切

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第八十二号（明治廿四年四月五日）

無名小說

神田一女生

第四回の續き

神「うゝさうか。一躰事といふのは何だ？　さうして君は書きつけるほど詳しく見たのか？」

「そりやある目的があるから一生懸命に見たさ」

種々の評、この男の言葉によれば、廣小路で老母を送りかへりしは月山の娘節子ならん。かねての氣質より考ふるも、かゝる目立つ擧動好むべしとも思はれず、只氣の毒とおもふ一心よりいたはり歸りしものならんか。其こと好き評にもせよ、かく多くの人の口のはにのぼり、ある人の小說中の美人にまで己が容姿うつし出さるべしとは實におもひかけざるべし。節子にして下婢もつれぬ樣はいやしくもとてこそ買物の爲め途中より下婢を他にまでせしものなりとぞ。とにかくにこれこそ耳に入らば、かねての氣質、如何に後悔することゝならん。實にうき世とさとるべし。

此處は麹町三番町、黒板塀をたてまはした角の家、見越の松といふ處が柳になッて、長くそともに枝を垂れ、そよふく風に靡く姿、頃は六月半旬、もう廣がり伸びた葉おもむき深きやうなれど、なびく姿にくゝは見えず、是が柳の持前なるべし。家のまはりは細い溝でまはし、門の處へ斜に石橋をわたし、入口までは一間ばかりの隔り、鳥度風流な拵へ、門札は三重縣士族青山敏、爰へがらくッと梶を下した二輛の車、車夫は急いで駈けよみ、入口の格子戶がらッと明く、おかへりの一聲、車引き入れたらうとおもふに何も云かまゝ、で先に下りたのは老女、あとに添ふたのは少女なれど娘とも見えず、孫とも見えぬ、又嫁とも見えず、少女はふッと表札を見て、忽ち胸に浮んだ種々の感。青山…敏…そんならあの青山さんかしら……昨年卒業なすッて……さうだ〳〵弟が番町だといッたッけ。さうにちがひない……まて見るとあの方がお母さんかしら……まァ不思儀……さうだと弟のお世話になることも……お怪我のお詫びもよウく……あの秋色と殘花の著者、どんな人かしら……こはい方だと花子さんが仰ッたッけ……あゝいふ人が、かういふ人かと兼て噂に聞いてる人は何となく見たいやうな心持ちもする。いろ〳〵想像をおこしてはいりもせずにゐると、

老「さアあなた此方へおはいりなすッて。少しの事にとんだ御心配を掛けました……」

といふうちも手はよほど痛む樣子、

老「さアずッと丁度悴も宅でございますから」

悴……秋色の著者……どんな人かしら……何んと挨拶したらよからう。

第五回

さまで廣からぬも庭は丁寧に掃除され、一面に打水して、

そゝも今したばかりと見え、青々とした芝日中は照りつけられて萎れて居るのも生々して低い木は葉末から露をしたゝらせ、すべて晝のあつさを洗ひ流した夕景、西南をあけた二階の障子のこらずとりはづして、白木綿の日覆卷き上げられて居れど、今しがたまで下ろしてゐたものとおぼし。　床の間なぞ格別裝飾品は用ゐず、只一軸の軸、一瓶の花瓶のみ。それも花は活けてなし。　坐敷の中で一番目につくは南の方に掛けたる額、故大久保の遺墨なり。　爰に碁盤をはさんで二人の若年、そばには氷でも飲みしものか、あきコップ二つ盆の上に載せられ、新聞二三枚散亂せり。　其他に各右の傍に碁器と團扇を置くのみなり。　一人は廿五六にて、三つ四つ下なるべく、顔の道具すべて尋常なれど、色白きと鼻の下の八字髭、美しき故あッぱれ一個の好男子と見られど、にやけ男の評は免かれぞ。　ネル縞の單衣に白ちりの兵兒帶、膝はくづしてあぐらをかき、左の手に團扇を持て居れど、風を呼ぶ樣子にも見えず、只いたづらにひねくッて居るばかり、動かす度にひか／＼するは指に嵌めた金剛石の指輪、はめずもがなのことなり。　此やさ男は花子の兄の武一、四五年前に洋行して、一月ばかり前に歸朝せしものとぞ。　一人は同じく目鼻立そろひて、色も白くてあれど、一つぶにいくらといふ親の心配と共に金を掛けた菊石べッたり、あれど眉も分からぬといふ程の難症ではなかッたものと見えて、眉は黒々と

其位置を守り、一躰の顔だち何處やらにまとまりがあり。　これで菊石さへ無くば、先の男より一段の好男子、鳥渡見るとこはいやうなれど能く／＼見てゐると威あッて猛からぬとでもいひさうな英雄顔、この男こそ青山敏、昨年大學を卒業して、當時はある學校の教師……文學士、人は見かけによるものならねど、文學士には似合はぬきッさうな質なり。　銚子縮の單衣に是も白縮の兵兒帶、腕をかためて、まくッて、膝の上につき立て、一生懸命に碁盤を見つめて、おろした黒一手、

武「やアしまッた、やられたか。」

と膝を打ッて落膽した武一、

青「わはゝゝ愉快々々、是で僕の方が少し恢復の途がついたといふものだ。」

武「馬鹿いへ。負けてたまるものか……さうすりや僕こそから切るれだ。」

青「きる？……この石が鈍ら刀で切られるものか。」

また暫くは無言、只石が碁器のうちでちやら／＼いふのみなり。

武「もう大概いゝだらう。　つくッて見やう。」

青「今度は僕が勝ッたぜ……あんまなんでも連敗は恐れ入るからね。」

武‥　さうかなア……どうも今度ハ兜を脫いだらしい。」

青「一……二……三……君の方こいくつか……さうか。ぢやア

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

僕が六目勝ッたせ。　ああ先是で逆上が下がッた……汗がびッしよりだ。」

袂から半紙を出して拭く。

武「はゝゝ、たまに負けてやるのさ。」

靑「うゝそれもよからう。連勝連敗で面白くないからなア。もう一番しやう。」

武「一度勝ッたと思ッて味しめて……又まけると口惜くなるせ、よし玉へ。」

靑「一度ばかり勝ッて止すのは残念だから、二三番たてつゞけるのだ……しかし君も強いね、あッちでやッたか?」

武「やッたとも公使館の河井ね、あの男が碁盤を持ッてゐて、閑暇なときには始終さ。」

靑「さうか。あの男を相手にやッたなら上る筈だ。」

二人は碁石を片附けて、又打ちはじめやうとする處へとん〳〵上ッて來る花子、湯上りと見えて、白地の浴衣に紫縮緬と友染の腹合せの帶を無造作にしめ、團扇を片手に持ち二人の間に坐り、

花「もう濟んだのですか……どッちが負けて?　又靑山さん?」

靑「是は閉口、又靑山さんとで酷いぢやありませんか。なんぼ何でも今度も私が勝利を得たのです。」

花「おや珍らしい……明日雨が降らなきやいゝ。」

靑「口が惡くなりましたね。兄さんの西洋仕込ですか。」

花「何でもいゝことよ。約束の五目ならべを為さいな。」

靑「もう一度待ッて下さい……武一君にさッきからの復讐するから。」

花「およしなさんよ、返り討になるばかりですよ。ねエ、兄さん。」

武「まア首尾よく仇討つのは六かしからう、はゝゝ。」

花「さうら御覧なんさな……でもなさるの……よくッてよ、賴みませんよ……靑山さんは噓言者ねエ。違約するのねエ。そんな人とは今が今まで知らなかッたわ。」

靑「こりや酷しい。閉口〳〵。ぢや暫く中止にしましやう。」

花「何も中止にしなくッても拘はず為さいな。心に恥ぢる處が無くば。」

終に力を入れていふ。

武「もうさッきから引ッきりなんで、僕も少し閉口の方だから、暫く中止がいゝだらう……碁盤をそッちに片附けるがいゝ。えゝ花さん。」

花「私や知らなくッてよ。」

靑「こりやお花さんの承諾せんのも尤だ。君も洋行がへりにも似合はない、こんな重いものゝ取り片附けを婦人にさせるといふことが有るものか。どれ僕が片附けやう……處で

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

御逆鱗の種の碁盤も引ッ込んだから機嫌直して何か面白い咄爲ましやう。」
　さほど腹も立たないのを鳥度怒ッて見た花子、青山が機嫌取ると幸、ホッこり笑ッて、
花「別に何んにも怒りやしないことよ。　たゞ貴君が違約するから酷い人だと思ッてさ。」
武「二言目にと違約々々ッて人聞きが悪いから止すがいゝ。四五年あはない内に花さんは非常にお饒舌になッたね。」
花「よう御座いますよ。　私のお饒舌は生れつきですもの。仕方がありませんわ……人聞きが悪いッて誰れも外に聞いてゐる人はありませんわ。　あッた處が眞實の事をいふのだからちッとも憚る處はないぢやありませんか。　眞實に兄さんたら嫌さ、先達手も一處に久し振りで仙臺へ行ッたとき、お父さんやお母さんにお花は手離して置くと生意氣に爲ッて仕方がありません。丁度卒業も爲たことだし、此方に置いて相應の處があッたら嫁に遣ッたらよう御座いましやうなんて仰しやるんだもの。この頃歸ッたばかりで何にも知らない癖にさ……だけども私がとう〳〵お父さんを解きつけて、また出京するやうに爲ッたからいゝけど……自分が早くお嫁を貰ひたいものでしやうねェ、青山さん？　貴君此頃何か聞いてゐらしッて？」
青「この節はもう學校の方が非常に忙がしいので、そんな事爲る間がちッともありません。」
花「さう。　いけなくッてねェ。　私は何か見たくッてよ。兄さん又西洋の咄し爲て頂戴な。」
武「この間大概爲てしまッたぢやないか。」
花「嘘言々々何時でも五月蠅がッて、仕舞にはおやふやな返事ばかりしてさ。　それに咄して下すッても西洋の女は色が白いとか、肌が奇麗だとか、やア何といふ女役者は實に美人だとか、そんな事ばッかり仰しやッて、ちッとも利益になること聞かせて下さらないんだもの。　眞實に兄さんはアンカインドよ！……さうぢやありませんか青山さん？」
と鳥渡青山の方を見る武一は柱にもたれかゝッてゐたが
武「はゝゝゝ青山君を裁判官で飛んだ譴責を蒙る譯だな。」
花「兄さん私が聞くから咄して頂戴。　あれいくらもミス何々といふお老婆さんのあるのは、ありや貰ひ人の無いのでしやうか。　適當の配遇を撰みそこなッたのでしやうか。」
武「そりや是まで雜誌にでも何にでも出てゐたらう。　西洋ぢや財産一條からさうなるのさ。　上等とか下等とか一方に片寄ッた方になると爲易いけど、中等社會が一番爲難いのだ。日本の様に手鍋さげてもといふ氣にはならないのさ。」
花「だッて財産が無くッたッて、夫婦暮らせるだけの收入があッたらいゝでしやうねェ。」
武「そこがさ中等の人間に爲ると派手な交際社會にも出るだ

らう。　すると日本でもさうであるが……まア他から招待されると返禮に先きを招くといふ處が獨身なら爲なくッてもいゝけど配偶があると是非それも欠かさない。　すると大變金がかゝッて、長い間大概は財産ではつゞかなからう。　いやなら面白い交際社會を脫けなきやといふんで、そんならいッそ獨身で居る方が金もかゝらぬ、面白い交際社會にも出てゐられるといふ處から……尤も其他にも原因がいくらもあるだらうけど、それで獨身ものが多いのさ。　それに西洋ぢや女の數が男の數より多いから、何やかやで、ミス婆アさんがあるといふことだ。」

花「さうでもかねエ。　西洋人といふと誰も〳〵金滿家のやうに見えるけど、尤も日本になんぞ居るのも貧乏ぢや來られますまいけど……それに私や時々おもひますわ、日本ぢや昔から節婦だとか、孝女だとかいふのも隨分澤山名を殘してゐるけど、西洋は婦人のやうに、社會の爲めに是ほど盡して死んだといふのはあまり無くッてねエ。」

武「そりや是まで今川流の敎育と日本は弊風に妨げられて、ゐたからさ。　昔だッて隨分志のある婦人もあッたらうから、壓制主義を廢して、自在にある部分にまで放任して置たら、今の世まで名を殘す女も有ッたかも知れないはさ……是からは段々立派な婦人が出來るだらう。」

團扇を徐に動しながら默然として談話を聞いてゐた背山

背「然し女子は男子と違ッて、社會の爲めに盡すといふのは鳥渡容易なことぢやありますまい。　それは協力したらさうでもないでしやうが。」

花「それがねどうしても西洋の婦人はえらくッてね。　まづ年が若いのお單身で世界を一週するとか……癩病嶋に行くとか、數十里、數百里もある處へ安心して、渡航するといふのも、大膽でしやうか、勇氣でしやうか、またも宗敎上から神は何處にでもあると心が安らかになッて……安心してゐるのでしやうか。　私は實にえらいと思ッて感心してゐることよ。」

背「多くも宗敎上からくるのでしやうが幼少からの敎育が獨立心を起させるから依賴するといふ心が無くなッて……心がしッかりしてゐるからでしやうな。」

花「私も死ぬまでには野澤花といふものも是丈のこととして死んだといはれるやうになッて死にたいと思ひますわ。」

武「生意氣なことをいぬな、女のくせに……そんな事は實際見込みが附いてからいふものだ。　實に生意氣で仕方がありや爲ない。」

花子は少しつんとして、

花「おや可笑しいことを仰るのねエ。　自分は考へて居る處をいふのに見込みが有るも無いもいッたことぢやないぢやありませんか。　兄さんは當世の人、殊に洋行までした人に似合はないくだらないことを言ッて、何のいふと、生意氣々々

ッて……何處が生意氣ですか？」

背「お花さんのいふのが尤だ。　幸ひ明治時代に生れたのだから、まア〳〵奮發して社會の爲めにでも何でも力を盡すがいゝです。」

武「さアそれ社會の爲めに盡すといふのが分からないのだ。一躰婦人といふものは一家の妻君になッて、よく家と始末、夫を愉快に暮らさせて行くのが務めで、丁度芝居の黒ん坊のやうなもので、かうさへして行けば、それで間接に社會の爲に盡して居るのだ。　殊更に男子同樣奔走して、事をするに及ばんことだ。　夫れも寡婦になッたとか、何とかいふならともかくもさ……まアあんまりそんなことは言はんがいゝ。」

花「だッてたま〳〵此世に生れて來て、野澤花といふものは何處の隅に何して居たものか、犬死同樣に死ぬのは嫌ですわ。

武「花さんおまへが今死んだッてまさか犬や猫の死んだやうにどッかの野原に投り出して、鳥の嘴につゝるやうなことはしないから安心してゐるがいゝさ。」

からかひ半分にいふ妹もやッきとなッて、

花「又兄さんが人を馬鹿にしてさ……何とでも仰しやれだが、私も私の精神といふものがあるから……かまッて下さいますな。」

武「さうか。そんなら勝手にするがいゝが、あんまりそんなことといッたり、跳ねまはッて居ると、仕舞には人によくいはれんぜ。」

花「そりや仕方がないさ、ある一部分の人……即ち兄さんのやうな人達にも惡く言はれましやうさ。　四方八方、誰にも惡く思はれやう言はれやうッていふのは私にも到底出來ませんもの。」

背「然し男子と異ッて婦人には世間の人が多く目をつけるから隨分難儀なものさね……まア兎に角あまり評判受けるやうな行ひはせん方がいゝですな。」

武「是はまだ僕が彼地にゐる頃の咄しであッたが、或英國の貴婦人が日本に漫遊して、ある高等の女學校を參觀して、其學科が高尚に過ぎると驚いたといふ談話があッたが、なるほどさうかも知れんて……然し此頃はやゝ實用的の敎育を主張する人が出てきたのはいゝ鹽梅だ……外國と反對で、日本は男子より婦人の數が少ないから、いゝやうなものゝ、あんまり生意氣なことばかり言ッて居ると妻君に貰ひてが無くなッて私の厄介だぞ。」

から嘲けるやうにいはれて、妹も余程口惜しかッたと見え、立ッて坐り直し、兄の顔睨めるやうに見つめ、

花「兄さんは眞實に卑劣よ……女子も男子同樣敎育を受けて、何もかも解るやうになると、昔のやうに無理に壓制して、威張ることが出來なんもんだからそんなことといふのでしやう。」

第三十九回懸賞文藝應募得點

題　汐干狩

●唱歌

（イ）　奥野やす（サオヒ）

花さく桃は三千年の
めでたき春の三日の日に
波をかたみの野面一里、
海草拾ふ其樣く
見えて心も長閑なるらん。

今日ぞ初めてそのるある。
潮も遠く退きて、
四方より集ふ諸人の
袂さそ夏の眺めとや

（ロ）　水野ひで（オ水サカ）

青海原の底見えて、
もすそかゝげて籠さげて、
あまの笑顔の汐干とき、
藻草を踏みて岩越えて、
汐干れ濱を尋ぬれば、
都の人もうら人も、

舟も動かぬ汐干かあ。
いざや拾はん諸ともに。
都れ人もとはれけり。
いざや拾はん諸ともに。
眞珠の貝も多からん。
いざや拾はん諸ともに。

（ハ）　瀧野潤三郎（イハシロ）

時し移れば草臥れて、
端なく見合さす顔と顔、
獲物も多く時も經ぬ、

屈める腰をのばしつゝ、
一人の少女は聲かけて、
早さし潮も近づきぬ、

楽みありて若しその
稚き君も今こそぞ
拾ひあつめしうつせ貝
悦ぶ顔を見給ふも
家路と急ぎたまひねと
今日始めての汐干狩、
君と遲しと待ちまさむ、
笑顔も流石懐かしや
餘波惜しげに振りかへり、

來ぬ間こそ實に樂しけれ、
門に立ちてや待ちまさん、
好き玩弄物よと雀躍し、
嬉しきこと、おぼさむや、
云へど一人は微笑みて、
名も赤貝のあかねども
人もいたはし幼弟の
誘させたまへと打連れて、
振りかへりてぞ歸り行く。

（ニ）　松乃（イヘトニ）

日の麗らかに香もわる心地
退き去りて磯原ひろく
紅裙かへす風さへおもしろ
拾ふは何ぞ、あさり、蛤
三つ四つ五つ集め眺めて、
昔しみかどの敎へ慣れし
貝とはいへど片身々々の
云ふ言の葉と思ひいでつゝ、
家へ歸らんとく〳〵直ふ
無理を云ひ張る親にさゝげて

海原遠く霞れうちに
彼方此方よ人影まげし。
濕地を踏むもいと心地よし。
千歳をちぎるその妹脊貝、
何よ思ひを其乙女子は
幾億万の數を數ふる
合ふて一体なすは一つと
はとりに居りし乳母よ聲かけ
片身は捨てゝ皆片身のみ
合せて見よといざ乞ふて見ん

以上四山第四等賞

（ホ）　露城（イセ）

吹くも汐風、寄するは波、
風のまに〳〵袖ふかせ、
色あらそふも恥かしや。
遊びくらして、汐もろ共に
むれたちかへる汐干狩、
のどけくかへる小女子だち。
（ヘ）
霞めるそらに花咲けバ
鳥にうかれて野の山に
彷徨かすとや今日はまた
い、い、い、い、
人の心を引く汐の
友に誘はれ、子に引のを、
い、い、い、
浮世と暫し忘れ貝、
其名を聞けバなかく〳〵に
廣き干潟にをり立ちて、
數も添ひぬとほゝゑみて、
（ト）
長閑けき春の汐干潟、
拾ふや乙女（乙女もひろふ）さくら貝。
うらゝの空に浪靜か、

波のまに〳〵往かひて、
燃る紅、見渡す翠、
樂しき春の一日をバ
今日の獲物と家づとに
春の霞の夫ならで

瀧野潤三郎（イヘシロ）

花よ放心
遊びくらせし人心
汐干狩よと急ぐなり。
い、い、い、、、、
力何程知らねども
老も若きももろともに
い、い、、、、、
拾はんとてや集ふらん、
からき味ある汐干狩
うれしくひろふ妹背貝、
語る人さへ多きかな。
（チ）　か　り（　）
浪の花さへ咲き滿ちて、
友呼びかはす濱千鳥、

身に（の）うきことも忘れ貝。
（ナ）
汐な干ね　いざや拾さらん　あさらんと　うらゝちなれし
海士の子が　親のなりはひ　たすくんと　つゝきし袖を
からげつゝ　貝とる樣の　あはれなり　身より大きゝ
あら籠に　あさりてかへる　己の家　見る父母は
いかならん。

小田よし（エナゴ）

以上四山第三等賞
（リ）
春よしくれば（としあれバ）わだつみの　そこも霞や
たちぬらん、　汐ひる沖よ貝ひろふ　人れてゑさへお
ほろあり。

撫箏女史（ミノ）

右第二等賞

●文章
（イ）

氷野秀（オホサカ）

「あなた、いゝ景色ですね、思ッたより遙か……名所で
見るより聞くがいゝと言ッてもこの浦は別でしやう。」
「此處は何時も良い眺めですが、殊に春ハ格別です……で
すから蛤拾ひれ多いことと（ヌキ）御覧なさい。」
「さうですねエ、妾等バクりと思ッたが彌次馬連も多いで
すねエ。」
「こゝ等ハどうでしやう。」

「いゝやうでそからそいりましやう。」
人並に晒木綿に頭を裹み、首を捲き、裳からげて、はいりました。こそさうに二歩三歩。
「あなたどうです足ごゝろは良いですか?」
「どうも愉快ですね。面白い……わッ……深いこと!」
「用心なさい! あぶないですから。」
「ありがたう。一イ……二ゥ……三イ……四ゥ……一盃になりました。」
「お早いこと。妾も山もり拾ひましたが、もう一盃拾ひましやう。」
又も籠を片手に拾ひもし、話しもし、歌もうたッて、極樂蜻蛉となりました。」
「あッー」
「あなたどうなすッたれ?」
「こはいこと貝殼で足を切りました。あ……痛いこと……。」
「それではもう廢して、舟へ行きましやう。」
舟に乘りてはいと緩く、またいと急に五六町ばかり漕ぎ出したまゝ、ゆらり〳〵波の支配に任せなしる。新鮮の肉に飽きたりしも、盡きぬ興味にあかぬ眺めを嬉しみて、
「お波さん委曲諧幅のやうですね。誰も彼も老八まで小歌うたッて、愉快さうな……」

「さやう貝を漁る人ハ近く岸の櫻の遠見よく、沖の小舟の帆影かすかに、眞に一幅の活畫ですね。」
「この遊びに何もかも忘れて愉快でしたが……もう歸りましやうか?」
「歸る(の)ハ惜しいやうですねェ。」
時に斜陽扁舟を照りて、更に好景を現はしました。

(ロ)　　鶯遊女史(ケイトロ)

「みィちゃん、こらこんな大きな蛤が……あッたと思ッたら半分ですよ。口惜しいことねェ。」
「おやさう? あれゝゝゝ」
「何をそんなに笑ふの?」
「でも、そら……磯の鮑の……ね、だから、貴女の戀はだめですよ。」
「あらみィちゃんの人は惡いこと。だがあれ鮑ではありませんよ、御氣の毒さま。」
「蛤の片思ひ……あれゝ、何とか一首浮びさうでそね。」
『我が戀は汐干に見えぬ石ならで、蛤貝の片思ひとは』
「いやですねェ、私ハ戀なぞを爲たことはありませんよ。れゝよ! いくらでも! お冷やかしなさい! 今に仇を取ッてやるから………」
「それこれいことねェ。似不似天は御免でそよ。なるたけ御手柔らかに……こら妹背貝…憚りながら片思ひなど

とはちがひますよ。」

「あなたの名はおミヨさん……よし〳〵仇を討ちますよー」

「断らなくても不意にお討ちなさいよ。」

「また憎らしい事を……『妹背山、其名も仇とありけり、いとの縁の切れ果てしみわ』」

「どうも御名吟おれ痛み入りました。　あのあなたのそのお姿がをかしさに先きからくす〳〵笑ッてゐましたよ。」

「なぜ?」

「まアお聞きなさいよ……『魚あさる、鷗とも見えて汐干がり、とる貝なくも水や濁らん』」

「わら、人の悪口をかり云ッて、自分の口から唾の飛ぶのも知らずにさ。　えヽと何とか……『石をうつ瀧とも見えて、君が口、いふかひなくも唾や飛ぶらん』」

「わはヽヽヽ」

「ほヽヽヽ」

（ハ）

醉　香（ケイカウ）

母「清ー　清やー　お前は何を書いてるの?」

清「何ッて……作文を書いてるの。　どうも六か敷ッて……」

母「お前そんなに六か敷いなら、お父さんに伺ッて書くがいゝですわか。」

清「たッてそんな事したら先生に叱られるもの。」

此問答を聞きながら火鉢に倚り、烟草を燻らせし父は洋燈の傍にゐざり寄ッて、

父「清、一寸お父さんにお見せ。　なに……寸楮拝呈仕候陳者明日は汐干狩に御出なされ間敷や御伺申上候……えらく短かい手紙だね。」

清「でもそれぎりしきや書けないもの。」

父「お前私共も参り候間御同行如何とか又は大層面白いから御出なさらんかとか書くものだよ。」

清「だッて面白いか面白くないか分りませんもの……お母さんてば去年松ちやんとこから誘ッてくれたとき遣ッてくれなんだもの。」

母「お前は行かなかッたから書けないと言ふのか?　まア可笑いぢやないか。」

父「はヽヽそんなら今年は叔母さんに頼んで連れて行ッて貰ふがいゝ。」

清「嬉しいね。　お父さん急度ですか?　間違ひないのですか?」

母「何で嘘をいふものかね。　そのかはり勉強しなけりやいけないよ。」

清「あいよ。　嬉しいな……」

（ニ）

奥野　やす（サホ）

「そら御覧、お春さんあれが三の洲ですよ。」

「おやまア、潮はこんなに退のないんですがねエ。」

「行ッて見ましやうか？」
「險呑ぢやござい ませんか？」
「なんの貴女、そんなに澤山居らッしやいますもの。」
「でもお供いたしましやう。」
頓て二人の少女は裳を高く掲げて、跣足のまゝ靜かに磯へ下りて砂の上―洲氷を踏むやうに―を辿り辿ッて、やう〳〵二の洲まで來ました。
「大變心持ちが惡いですね、足の裏が……」
「ほんとに駱駝の足でも借りて來ればよかッたのですね」
「ほゝゝ」
笑ひ興じながら、柔荑のやうな軟弱い手で折角固い砂を堀りかへしても、哀れ！此處も彼處も早や人の探し盡した跡か、手に掛ッて來るのは蜆よりも小さな蛤。 が、あれでさへ辛苦して取ッたのだと思へば道に捨てもならず、丁寧に籠の中に拾ひ入れる心のはかなさ！ 見れば爪、何時の間にか銀のやうに割けてゐたので、これでは明日裁縫をするのに勝手が惡からうと思ひながらもまだ、なんでも大きな蛤を手に入れるまではと呼吸もつかず、探しまはる折から、春子孃の指に觸れた大の蛤「嬉しい」と思ッた甲斐も……手に取り上げて見れば殼ばかり、「ちッ馬鹿ッ」思ふ心を抑しけゝんで、
「お汐さん、こんなに大きいのよ。」
「おや……なあ、いや、嘘バッかり。」

「はゝ、併しもう歸りましやうか。 此處は磯の方から先き潮が來ると聞て居ますから。」
「お供いたしましやう。 そして妾方へお越しなすッて下さい。 老媼と一緒に炊事して、遊びましやうから。」
「そゝそれは四五年も前のことでしたね、貴女、こんな年になッて……」
「ほゝゝ大層すましておいでゞすねェ。 が、年を取れば猶更肝腎でせう。」
「家政の實習といふ論を持ち出すのでしやう。」
「はゝ、時に取ッての口實でしやう。」
打戯れて、餘念ない二人、まだうき世のうきを白波もこの睦ましいのに感じたか、音も靜かに、分けて今日は空も長閑です。

以上四章第四等賞

（ホ）　悠々女史（ケイ）

聞ゆるものは岸打つ波のすまさじきと、磯馴松の風の音、見るものとても限りなき海原に毀束あげに浮ぶ水鳥の外は絶えてなかりし此處の浦の、今日は汐干狩とて潮の退くを待ち兼ねて、都下の若老、幾多の男女寄り集ひ、笑ひさゞめきて、十里の洲汀藹々の氣充ち滿てり。
樂しき日の暮れ易うして、何時か山端は茜の幕引廻し、夕陽遠く波に映して、景色いとおもしろく覺えらるゝに、群集

の人はやう〳〵に減り行きしが、今まで彼處の一方に一團をなせし群れの中に稍年更けたる一人の女、
「おやもう皆さんがお歸りになる樣ですが……奧樣……」
二十七八なる、主とおぼしき婦、
「あまり面白いのでつい日の暮れるのも知らないで……それでは皆お歸りましやう。　おや春や太郎は？」
「はい坊樣は只今其處等に……」
と見廻せど見えねば、一同捜き立ち、彼方に馳せ、此方に回り、太郎や引、坊樣引……と聲を限りに呼び立つれど、何の答も荒磯の夕風いとゞ身に染むのみ。
さしも賑き濱邊、さしもどよめきし濱邊に、今は一群の外に人は無く、海面を見渡す限り波樣々として、水漫々たり。次第々々に立罩むる煙霞の裏より聞ゆる濕ッたる、凍えたる聲の物凄くも亦哀れなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

汀を離れて巍々と峙ちたる巨巌あり。海に面する岩際に、見ればまだ十にも滿たぬ小供のしきり〳〵にもがゝわり。無慘、これ如何に些やかなるそが双の腕は何者にか纒はれて、……渠今全身の力を籠めて、引離さんと焦れども、進退心に任せねどいと甲斐なく見えたりける。
暗々たる洞には僅むかりの水を湛へ、一個の大なる章魚其中に蟠れり。　なゝさては頑是なき小童が、何氣なく其の手

にや觸れけん、足をや捉へけん、この憂目を見る不便さ。
日は暮れぬるに風さへ吹き出でゝ、濱邊の物凄さいやまさり、潮さへ漸々に滿ち來りて、一息々々に童兒の足音近く浸したり。今は心も半狂亂、呼べど叫べど答ふるものもなく、岩はにあたる風の音、寄せ來る波に打ち消さる。
風は愈々吹き荒み、どッと寄せ來し大波は、あはや童兒が頭上に醉けたり。　絶叫一聲！　沸え騰るが如き泡沫の下に！
あはれ童兒が玉の緒も絶えぬと見えしが、水を得て、彼の惡き大章魚め、からみし足をや離しけん、潮たれながら岸邊の方へ馳せ出づる童兒は敷町、唯無言！
太郎や引！　坊樣引！　碎くる波の絶え間々々に響くを聞くや否童兒は意はず、ワッと聲高に泣出せば、濱風・裳裾取らせて韋駄天走り、眞砂を蹴立てゝ馳せ來る女性、矢庭に童兒を抱き上げ、言葉なくてはら〳〵〳〵。　童兒の顏に注ぐ涙ぞ千万無量の意。

野（へ）

康元あさ（ヒサカ）

山に匂ふ百千種の花を咲く軟風でこゝにまた潮乾いた磯洲の上と吹き、沖の面は波平らかに一點二點の白帆を載せ、遠近の島山は影たをやかに霞の中に薄化粧を施して、見渡す千里の光景は中々畫にも寫せぬ程です。
此畫にも寫せぬ好景の中に同窓の娘と語り合ふて、紅の裙を低く褰げながら、そこここゝお潮干狩する其樂しさ。　おや

鮑貝か、あらまたいさら貝が……かよわい足の歩みもいつよ無く競はせて、手を忙はしく、籠に運ぶもまた面白く、人生痛苦の渾ての念はいつくにか去ッて、背開んて爽ましく思ッた仙人世界に逍遙してゐる心地もしました。

併しつら〳〵思へば、今此處よ樂しく貝をあさッてゐるところは、昨日まで狂瀾怒濤の高く吼えて、大魚の縱橫に游泳を試てゐた處、當時折あッて檣摧け、揖折れ、舟諸共に一片海底は藻屑と消え果てた旅人も有ッたことでしやう。又こと有ッた其夕よは、青白い片破の月一痕雲間から覗いて、恨の亡魂、聲啾々と荒磯に近づき、あれ飛び交ふ千鳥の聲も腥いばかりでしたらう。あゝ、悲慘憺凄絕の光景を見た目、其目で潮退いて、烟波麗はしい今日の樣を見たり！

以上二章第三等賞

（ト）

徵々女史（トロ ケイ）

息を切ッて馳せて來て、外の格子をがらりと開けて、九つばかりの男の兒が、

「姉さん！ 只今！ お母さんは？ さう？ あのね……」

直ぐ跡から小主人が開け放して置いた所を通ッてわん〳〵と尾を振りながらやがて來たのはぽちといふお傍去らずの狆犬でした。若旦那はちよいと振り向いて、ぽちの頭を撫でゝやりながら、「あのねエ」の續きを話さうとしたとき姉と呼ばれた十六位の娘は小さな金蒔繪の重箱を拭いて居ッた手と止めて、

「ねゝ光ちやん、お早う！ 皆さんは？」

「皆な？ 皆なね 遲いの。 僕とぽちが一番早いの！ で、一番えらいの！ 一番たんと取ッたの！ だけれどあのね、婆やがいけないの！ 僕の帶と持ッて居てね、僕が見つけたのでも皆な本家の兄さんや、なんかに拾はせちまうッたもの。 振もぎッて行かうと思ッても、何なの……姉さん！ 婆やとあれでも力があるのよ！」

眞面目に話しかけられて、可笑しく、

「あゝさうともねエ、お前よりは大きいからね。」

「ほんとなの！ でね今日はをかしかッたの。 此奴があの赤貝に前足を喰ひつかれてね、きやん〳〵泣いたの！ 可哀さうだッたよ、姉さん！ だから何かおやりよ！ よウ！ 夫れがいゝや。」

「是？ こりやお雛樣のだよ。」

「あッ！ 飾ッたの？ 僕見やうや！ さういへばね、あッちで兄さんが、雪ちやんはあせ來ないだッて聞いたからね、僕が、姉さんは新暦の御節句だから、お雛樣飾ッたり、お褥染あしらいたりして、兄さんを待ッてますてッたら、猶弊だッて笑ッたの！」

姉は急に耳まで赤くして、「いけなかッたね、そうしたらよからうか」といふ風で、

「さう?………」
弟は見て、
「姉さん僕の分まで白酒呑んでしまッたの?」

右第二等賞

未練

笹川香涧（イが）

過ぎ行く月日に關守なく、今年も早や三月の末とはなりました。思へば去年いらつめに蛇を防ぐ法と尋ねた事もありましたよ、しかし其れも今は……今は……あゝ今は何の爲め? 祖母樣が此上もない嫌ひな者であッたと思へばこそ。だんだん暖氣にもなれば、早速之れを行ッて見やうと思ッて居た矢先き、何事? 旭よ照らされた淡雪同然、はや消え失せて、跡には只殘る影も無い移り香！ 今年丁度七十七、年に不足は無いとは言ふものゝ、孫の身のどうしてこれが悲まれずに居られましやうか。 去年迄は休暇に歸省して居た兄の軈て學校へ戻らうとする前日よれ、まめで居るやうにと御自分で無ければならぬ樣に、あられと豆とを煎ッて與へられたものを、出立の日と成れば、御老体をも搆はずに玄關迄出て來て、慈愛の燃える切火を打ッて、「勉强して首尾よく卒業しよ。」と勵まされた者を。 あゝ其れも今は思へば皆涙の種！ 忘れもせぬ去年の暮、妾に向ッて、「私と御前とは亥の年だから……丁度元日が亥の日に當るから祝はうね」と仰ッた其言葉が……まだ耳に殘ッて居る者を。 机の上に在ッた藍笄、發矢！ 其れは森の字の祝ひだからとて盃に書かれた時、其時に使ッた小筆でした。 思ひ出せば見る者聞く者が涙！ 妾が子供の時に教はッた琴の組は今は果敢なく遺物と成ッて、あゝそれを變える時も有らう事か……時にはふくれて罪ない琴への荒い爪當り、今更何と言ッても益に成らぬ事ながら、懺悔をすれば少しは罪も滅ぶとやら……誠よ濟まない事と思ッたれ、えェ！ お祖母樣の亡くなられてからの事、勿体ない！ なぜその時に大人しく難有く覺えなかッたらう。 いつぞやもお祖母樣が島田に結へと仰ッた時、妾は束髮がいゝと言ひ、可愛らしくッて好いから赤いものを用ゐよと仰しやれば、淺黄の方が好いと言ッた。 なぜなぜそんなに妾はいふ事を聞かなかッたらう。 抑も何の功があッて之れ程迄よ幸福に暮して居る事か。 父母には孝養とつくし、又祖父母をも大切にすべしと何やらの本にも有ッた者を、其を讀みながらこの行ひ、はらはらわれながらあきれはてた身の上。 それも皆此度の事で始めて覺えた譯、あの御詫びはさてどうしたら好い事か。 今、あゝ今は何を言ッても忌々しい塔婆が哀れげに立ッて居るのみで、答へるものも泣くばかり、たゞせめてもの心ばかりを手向くる香、それも山風に吹き飛されて、切角の功を無み、これも吾が心の至らぬかと思へば、猶更悲しく、聲さへ幽かに「御免遊ばせ。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

昨日まではハッきりとした「このお年でもよくまア御野遊ばされ、」と皆なが言ッた、あの御眼も今は土―此上もない悪らしい伊賀の土と成らせられたか。　去年は月が瀬の梅と御目に掛ける事が有ッたに、それも今は、梅の花と化して……

さて／＼果敢ないものは命―　残る人の身の上―

夢の心地で墓へ参り、夢の心地で家に帰ッて、さて直に取り出したは何ならう、まぎれも無いお祖母様の寫眞、誰やらが言はれた、『後の世のかたみならねと寫しおく身は空蟬のかたはかりにて』今更何となく寫眞師の悪らしく、持つ手はおのづとふるへて、見つむる眼には早や恨みの露が……はらゝ―　前後を忘れて「おなつかしや……」、はッと心附いて、起き上がれば傍には一葉の紙の御姿―　まことに空蟬のうたばかりの―

あゝ考へ出せば皆、吾が為た事が悪い事ばかり。小さな胸は只それのみにて閉されて―日頃神経質の我の事故、さア思ひ出しては中々にとまらず、済まない／＼どうしたら好いか、唯此上は両親への孝行が第一と漸やく心を静めて、吾身で吾が身を慰さめもしました。が、この様に心を改めて見れば猶更、祖母様がも少し此の世に存在へて居らしッたならば一日なりとも柔しくして御心を満足させ、万分が一の御恩がへしと致すので有ッたらうに、と返らぬくり言を心になげきました。

寂滅（韻文）

そかだ（ナイ）

白雲の　行方や　いづこ？
　定先とて　今　あら縄の
なふるとぞ　いよ　こし方を
　顧みる　身は　今の　ひれ。
世の　色の　紫緋を　飾れる
　人々の　かの　廣間にて
鳴り物も　哀れに　聞ゆり。
　涙にて　別れ来し　日も
指一つ　かゝなふる　のみ。
　何故か　家の　もろ人、
ぬれざりし　袖　なみだにて、
　また　逢はん　日も　ならんとは
知るや　否　露　白札に
　忌てしき　文字の　一つら。
つらねてし　秋の　草花
　うをる　香　何となう
何とあう　忌てしきかな。
　忌はしく　なるぞ　ことわり

緒は 絶えて それ 死せしなり。
　死せしなり、わゝ 死せしなり。
路傍れ 小草 なり とも
　今 心せで 踏みにぢらえや。
塵多き 穢土の 草なれ、
　たふとかる 浄土 にぞ おふ。
飛ぶが おと 身れ 宙に 浮き、
　足かるく 歩むよ やすし。
やすらかの 旅 なりとしも
　塵の 世の 人は 知るまじ。
塵の 世は 苦しみ の 世。
　苦しみに やは 秋れ 日に
萩の 生ふ かれ わざし野の
　露に まそ かこて こほろぎ。
明日を 知らで あは 日ぐらしの
　鳴くは そも 何を 松虫?
眼と 閉ぢば すべて これ 闇、
　耳 ふたぎ 何の 聞えん。
聞きも 見も 味ひも せぜ、

　何か よく・われを 悩ます?
煩悩か、唯 煩悩か。
　煩悩は うべ 人と 悩ます。
般若の 智も 爲めに 蔽はる。
　肉 痩せて たゞ 骨と 皮、
皮さへも 影を 隱さば、
　隱すべき 煩悩ぞ 無き。
あゝ、今の わが 身 ころ はや
　嬉しくも「聖」に 近づく。
「聖」と いひて 誰れか 疑がぬ?
　けぢめ よも、あらバ 赦しへよ!
一休は たゞ 早く 悟れり。
　ぞれも 居せん 毘盧の 頂。
ダナイデン 何處にか 居る?
　イクシオン 影 だにも 無し。
ミトロギー 一も 信なし
　われ こそれ あゝ、大智、大悟!
人 將に 死せん 時 其の
　言ふ 言は 善しと 聞けり。

言ふ　言の　美しには　あらず、
　善き　言を　いふ　ともめ　かも。
その　言は　産聲にして
　めでたくも　樂土に　生る。
萬法と　眞如の　姿
　見るも　眞如の　かくれか。
萬法に　かくれ　えなくに、
　休、相、用の　大なるを　知り、
知りて　なや　いふよ　言なく
　言ありて　なや　說す　なし。

浮世（韻文）　茅海微士

住みうき世なり浮世とは　誰が言ひそめし言の葉か？
父なる人に先だゝれ、　力と賴む母さへも
苔むす塚の主となり、　おとゝひ三人も早や逝きぬ。
味氣なき世に唯一人、　是も浮世の常なるか？
愛れ港よ遠ざかり、　情の沖も過ぎにけん、
我が行くさきは何處ぞと　眺むる彼方は蒼々と
限りなき世に限りある　假の浮世の假住居。
本の住家の懷かしく、　見かへる空よ雁の聲、
是も浮世の常なるか？
世渡る海の風荒く　進む甲斐なき捨小舟、
高き波にハ沈まなん、　するどき岩には碎かれん。
寄る邊なぎさに漂ふて、　何時かと取りつく島あらん。
是も浮世の常なるか
「あゝ戀人よ々々々　汝の姿見るときは
結べる心も解くるなり。　鬱せる思ひも開くなり。
あゝ愛らしきその眼元！」　ふと目を醒せバ影もなし。
今は何處に住むやらん　是も浮世の常なるう？
因果は廻る小車れ　輪ねの迷ひをさましなば
心は安し山の奥　月に嘯き花よ醉ひ、
幾年月の秋のそら　鹿の鳴く音と聞く每に
昔し忍ぶもなそれなり。　是も浮世の常なるか？

うらみながらつゝみのあさつゆ

恨長柄堤朝露

立花家かとる作

一 幕

場割 長柄堤跌れの場

役割 片桐且元●木村重成●大野の郎党玄蕃 雑兵二人●竹本連中

本舞臺通し、常足の二重草土手の蹴込み、上手能き所に長柄堤と記したる標示杭、花道より二重所々枯れたる秋艸の土手板、あの後淀より大坂遠見書き割り、上下樹木にて見切り、都て長柄堤の体、爰に玄蕃陣笠鎧郎党の拵へ、●○両人雑兵にて鎗と松明を持ち立ち掛り居る、此の見得山下し、幽めて氷の音にて幕開く。

●「明け方とハ言ひながら、なんと滅法寒いぢやァねエの。」

○「さうとも〳〵、此頃は夜通しの巡り役、眠る間も何も有りやしねエ。」

●「夫れに引き替へ御城内でも淀様と大野様、定めてしッぽり御楽しみ。」

○「えゝ羨ましいことだなア。」

玄「これ〳〵飛んだ事を申す奴等ぢ。もし御目附方の耳に入らば、二人の首は直ぐところりだ。」

●○「え、。」

玄「斯うして斯えず見廻るも、関東方より御城内に忍びの間者の入るやも知れず、怪しき者と見るならば、用捨に及ばず打ち取れと、申すはほんの役目の表、實の處ハ片桐且元、彌々来る九日に退城とハ極ッたが、底意分らぬ彼の老ぼれ、密かお出しぬく行くも圖られぬ、其機に臨んで打て捨てよと、大野様から密々の厳命、其方達も手柄次第で、褒美の金は望み通り、寒い位に恐れずに隨分骨を折るがい、。 それ！」

と二人に小判をやる。

●○「やァこりや小判。」

玄「ほんの手附ぢや。」

●○「へい難有うムります。」

●「御金の顔を見た故か」

○「身体が大分温かになりました。」

玄「いや現金な奴等ぢや。」

●「然し之を頂戴しても賄賂とやらにハありませぬか。」

玄「馬鹿を申すな。」

○●「それならば大安心でムります。」と両人は小判を戴いて懐中に仕舞ひ、
○「斯う御手當の有る上は、いくら強くも彼れ老ぼれ」
●「只一鎗に突き留めて、大きな手柄を」と二人はきッとなり、
○●「していものだなア。」と強さうに言ふ。
主「お丶天晴れ々々、両人ぬかるな。」
○●「合天々々」
主「はッくしよ。まだ夜明けに間もあれば、はッくしよ。」
○「旦那」
●「流行風でも引きましたか。」
主「いや、川遊の方を巡廻なさん。」ときッと言ひ、
主「はッくしよ、両人續け。」
○●「はッくしよ」
水の音にあり、三人は上手に入る、跡鳴物打ち上げ、床の浄瑠璃になる。浄『名に高き淀の流れの音ぞ聞く長柄堤の朝ぼらけ、四面の狭霧はれ暗き畦道傳ひ静々と豊臣家の柱石、幼臣補佐の大忠臣片桐市正且元は讒者の爲めに情なや、今日退城の胸の中』と下手より且元白髪かつら甲冑大刀馬上にて出で來る。浄『尾花の霜を吹く風に嘶く駒と北風のためしも斯くと身にこたへ、ためらふ彼方に人の聲』と且元は愁の思ひ入れ、揚げ幕にて「おい〱」と呼ぶ。
且「風にもつれて幽かなれど確かに我を呼ぶ者ならん。さては大野がエ丶。」と油断なき仕打、浄『合点行かぬと不審の折、程もあらせず一散に駿馬に鞭も宙を空、漸々走り木村重成』と向ふより重成鎧下附大刀陣笠を冠り、馬上にて一散に駈け來る。
且「や丶長門殿か。」
重「京橋口より密に御出馬と、腹心のもの丶知らせにより、取る物も取りあへず急ぎ追ひ付き申したり。」と息忙しき仕打 浄『重成馬を飛んで下り』と重成馬より下り、馬を側の樹木に繋ぎ、思入あッて、
重「若年の某申す迄には候はねど、君々たらぬと雖臣々たり。淀殿讒者の言を用ゐ、貴殿の諫めは露聞かず、不仁の振舞あらせたまふも、今日貴殿退城あらぬ、明日よりは大坂方、暗夜に燈火失ふ如く落城なさんは瞬く間。」
且「や。」
重「さ味氣なき世に武門を見限り、高野に登る御胸中。

よく〳〵の事ありとも、重成とくより推察仕れども、危急に迫る味方の運命、幼君の御身の行末思召さバ、何卒御心勞へし、思ひ止り下さるべし。　御歸城の上は某が邸の内におかくまひ、淀殿にハ一命捧げ、御諫言を申し上げ、何御聽き入きなき上ハ是非に及ばず諸共お死生を決する心の覺悟。」

且「ム丶」と思入き。

重「御家の安危ハ且元殿、貴殿の心只一つ。　御歸城の儀偏に願ひ奉る。」浄『信義の言葉且元が胸よひッしと釘かすがひ、打たるゝ思ひ切なさつらさ、ぢッと隱してさあらぬ体』と且元ハ色々ありッて、

且「しか言はるゝハ理なれども、諺にいふ大厦の覆へる一木の支ふる能はす、人心離れし大坂城、老れ朽ちし且元ありとて何程の効あらん。」浄『そげなく放つ一言に此方もきッと轡を押へ』と重成ハ且元の馬の轡を扣へ

重「こゝ心得ぬ仰せかな。　三度諫めて躬去るとの本文無きにはあらねども大閤殿下ハ御遺言に幼君守護する御身にして、日頃の忠義と打ッて變り、危邦を捨てゝ遁るゝ御所存、重成聊か合点行かぬ、是にハ深き計略あらん。」

且「や。」

重「夫れとも某若年と侮ぶみ、御心中明かし下さらぬバ、誰を怨まん是非なき次第、なまじ一命生へて、御家の行末見るよりハ腹かき切ッて、先君の御側使ひを仕らむ。」浄『動かし難き鐵石心、とくと心に且元がうなづきながら馬と下り』と且元馬より下り、

且「重成殿。　我武門と見限り、高野へ行くとハ詐り事、實ハ徳川家お降るなり。」

重「やゝ」とびッくり仕打。

且「さゝ其驚きハ尤千万。　これぞ最後に且元が、御家に盡す苦肉の密計」。

重「なんと？」

且「和殿の忠義厚きにめんじ、今こそ明かす我心底。　人跡斷えし此堤、暫時是にて語り申さん。」浄『四邊見廻し茲方お向ひ』と二人ハ捨石に腰を掛くる。　しんみりとした合方になり、且元ハ仕打有ッて、

且「嗚呼天なる哉、命なる哉。　百計の一計なる三ヶ條ハ秘策を献じ、今より二年と過ぎぬうち、徳川勢を打ち亡ぼし、昔にまさる豐臣の榮と見んと數々の苦心も水の泡となり、情なや淀殿ハ大野の爲先に迷はされ、我密計を御用ゐなく、夫

れのみならず既に和殿も知らるゝ如く、以て此外の御立腹、やれ不忠者、人面獸心、とく〳〵誅戮なすべしと嚴しき仰せ、御前を下り、それより登城差し止められ、閉門蟄居の昨日今日、思ひ出せば故大閤殿下薨去の砌り、數多臣下も有る中に密かに我を召したまひ、秀頼の身はくれ〴〵も汝に頼むと御遺言、寸時も忘るゝ間もなく、此肉は醢となり、身は寸斷になるまでも何卒幼君の御世と爲さんと是まで盡す赤心も、神佛且元を助け玉はず、かく追交際と成り行くとはよく〳〵武運に拙き身の上、思ひ出せば出す程、三度の食事も咽に通らず、夜も眠られずこれこの通り。」浄『顔色衰へ半鬢も一夜のうちに雪や霜』と宜しく仕打、

且「淀殿の御憎しみは日に増り、刺客を以て密々に我を殺さん身の危うさ。夫れ厭ふにはあらねども、つら〳〵時勢を考ふるに、且元在城なる時は反ッて將士の心動き、人心一致和合せず。これ籠城の妨なれば、心を決してこの降參」

浄『主從三世の縁薄く、幼君在す大坂城、跡に見捨てゝ明日よりは」

且「敵地の粟を食む口惜しさ、御推量あれ重成殿」浄『双の眼にはら〳〵と落る涙は雨やさめ、重成漸々涙を拂ひ」と

且元と無念の仕打、重成は思入あッて、

重「はゝア恐れ入ッたる忠義は段々、重成落涙の外ムりませぬ」と涙をむせぶ仕打あッて、

重「是非なき次第といひながら幼君始め大坂方、これより頼む人も無く」

且「ないや某退城したりとて、何とて頼む人なからん。紀伊國九度山に世を忍ぶ眞田幸村を大元帥と仰ぐ可し。かねてより今日あるを察し、某ひそかに君に勸め、數々人を使はして、君臣の禮を結へば、不日入城致すべし。然る上は關東方、たとひ日本は總軍を以て押し寄するとも、何んれ〳〵大坂城は大磐石。某敵地の犬と爲るとも心は常に君側を守護する苦肉の一計は大事の爲に必ず報せん。」とは言へ後來且元は敵に降りし不義者と」とちッと仕打あッて氣を替へ、

且「批判も恐れぬ身の潔白、日月天地も照覽あれ。」浄『熱鐵を飲む切なさを堪ふる胸の四苦八苦」と且元は宜しくなッて、目を閉ぢ、おッと仕打、

重「そりや後々までもそれ程に殘る隈なき御計略。はゝア」と感涙に咽ぶことあッて、

重「それに付けても近世の孔明ありと軍學の譽れも高き左衛

門殿、入城ありし北上に貴殿と軍議を廻らさバ、陸にいふ龍
に串、駿府公の白髮首鋒に貫かんハ手裡にあるに、おもへバ
く惡くき大野、浄『拳と握り、血走る眼』と思ひ入れ、
且「これあるハ某が心をこ兊し秘計の一卷、歸城の上に披見
あれ。」浄『鎧の袖より取出し渡せバ重成押戴き』、
重「時に取ッての六韜三略、あゝ悦ばしや」と且元ハ一卷
を重成に渡す。重成ハ之と披兊、一寸見ることあッて、
浄『天を拜し、地を拜し、よろこばしやと懷中なし』、
重「眞田殿と心を合せ、徳川勢の押し寄せなバ、」浄『かねて
仰せの名香を冑の中に焚き籠めて』、
重「忠義の二字を眞先きに、無二無三に斬り入り、突き入り、
寄手の者に一泡吹かせん。」浄『實に勇ましき壯男の年も若江
の仇嵐、散り際潔き敷島の日本櫻や花の香のあまれはかくと
知られける。」と重成ハ文句に合せて、宜しくある。浄『
且元完爾と軍扇開き』、
且「お、天晴勇まし。修羅の街の功名手柄、今見る如く頼
しゝ」と且元ハ軍扇を開き宜しく仕打、この時鷄鳴になる。
且「ありや鷄鳴、最早夜明けに間もあるまじ、いざ御別れ仕
らん」と且元ハ立ち上る。浄『立つ且元の鎧の袖、此方ハ

暫しと押し止め」、と重成ハ思入あッて、合方になり、
重「如何ある宿世の因縁にや、我稚くして父に離れ、夫れよ
り御身を師と頼み、父と慕ふて文武ハ修業、その鴻恩は須彌
滄海。報ゆることも情なや讒者の爲めに明日よりハ互に隔
つ敵味方、これ今生の御訣れと過ぎにしことを思ひ出し、不
覺の涙未練ぞと、御笑ひあるな片桐殿！」浄『師弟のちなみ幾
年月、父と敬まひ、子と呼ばれ、頼みしことも今日限り』
と宜しくある。
且「實にや和殿ハ言はるゝ如く、某とても和殿とハ血縁に勝
る水魚の友、死生ハ一と契りしも、こと皆仇となり果てゝ
今日の訣れハ死出の旅」
重「曾者常離とハかねてより浮屠氏の說に聞きながら忍び離
きハ凡夫の情。」
且「之を思へバ雪の夜に膝を交へて軍學の、」
重「御指南受けしも昨日の夢、」
且「その夢の世ハ泡沫無幻。」
重「思へバ果敢なき」と兩人顏見合はせ、
重且「浮世ぢやなア。」浄『互に手に手を取りかはし、跡の嘆兊
は胸の中、言はねハ言ふに丈男の武運の末ぞいぢらし』」

と両人別れを惜しむ件宜しくあり、

且「千万言ふても盡せぬ名殘。」

重「人目にかゝらば一大事。」

且「随分無事で功名あれ。」

重「御身も無事で」と且元は馬に乗る。浄「早霧晴れて三重の櫓もかすむ大坂城」と遠見打ち返して、大坂城書割となる。

且「ム、今生の御別れ。」と且元城に向ッて手を合せ、ぢッと仕打、浄『盡きぬ名殘りと両人が見かはす顔と陣笠あかりくせせすがる袖袂、又ちらくと一時雨鎧の袖に置く露よきら先く星の影消えて、風がもて來る陣大皷」と此時遠寄の頭を打ち込む。

重「ム、さては大野の一党が逐ひかけ來ると覺えたり。」

且「案に違はず飽までねぢけし道犬父子。」

重「何程のあとわらん。」

且「いや見咎められては事面倒いざゝらば。」浄「生死の別れ今あゝと思へば未だうら若き鵜殿の嵐よぱッと起つ孤雁の聲もいとゞなは」と此時下手より以前の玄蕃伺ひ出で、

玄「且元覺悟」と鎗を以て突てかゝる。且元は一寸身をかはし、浄「共音を添ふる七瀬川、見かるゝ氷の西東」と一寸立廻りあッて重成が方に突きやる、玄蕃ひよろくとするを重成はきッと押へ、浄「淀のつき橋中断えて、長柄堤の名には似ぬ。」

重「おゝ擒とずと少しも早く！」

玄「なにを」と又のゝるを突き廻し、浄「短かき契り雌雄の惜しき名殘りは一世の譯れ。」

重「さらば」と玄蕃と當る。玄蕃はばんと見事に反る。

此の途端どんと本鐵砲遠寄の鳴物を打ち込む。浄「別れてこそれ」と漸く馬の轡をきッと取り、向ふと見込むと木の頭、且元は馬上にて宜しく、双方引張りれ見得宜しく、床の三重遠寄に鶏笛を冠せて拍子幕。

日本音樂史稿

準縄子

歌舞伎

歌舞伎と云ふ事は（日本後記桓武天皇延暦十八年秋七月停伊勢齋宮新嘗會但以歌舞伎供九月祭とあり之れ歌舞伎と云ふ字の出處なる可し嬉遊笑覽）羅山文集野槌などに說あり醒齋の骨董集にも其古圖を模出し個は恐しき考證有りて皆出雲國の神子於國と云ふ者念佛踊に歌舞を面白く作成したるより賞玩せられ漸々五條の橋詰三條の繩手などに舞臺を構造し種々に舞ひ踊り傾城共其の風を擬ぎて遂に世に盛になりたり然るに室町氏の頃曲舞と云ふもの有り彼の猿樂と一班にして白拍子と云ふ者に相伯中せる事皆知る所也故に此の歌舞伎にも恐くは其頃より漸次猿樂曲舞、折中變態して胚胎を來せるには非るか看聞日記永享四年十一月十日（後桃園天皇）の條に鳥羽に女猿樂勸進昨日より始る、下略隆富朝臣重賢以下見物に行く歸參して語る美女五人の狀舞殊に勝れ言語道斷の見物なり拍子咲などへ男なり女其へ遊君の如し音發殊に勝れ倒世などおもしろき猿樂の躰神妙なり棧敷六十三間雜人充滿して群集數を知らず云々と見え又た後法興院殿（近衞政家公）記を見るに寛正七年二月廿三日の條に傳へ聞く今日武家に於ては女猿樂有り四五日前下邊に於ては八條に勸進あり言語道斷奇妙の間今日武家見物せらる云々女五六人皆太鼓鼓以下皆男云々狂言全男云々彼等近日越前より上洛す云々太希代事と又た二月十八日の條にも是日院御所に於て女猿樂あり新大納言雅親卿沙汰申す云々又た四月十六日の條に是日千本棧敷に於て女曲舞の御見物あり余も全作す女曲舞去十月七日より千本に於て舞勸進云々彼女生年十九云々容顏尤も美麗凡て諸人に超過す希代の事なり舞拍子言語道斷奇妙の至りなり見物雜人四五千人許り云々美濃國人云々先に男舞躰捌次に十四五許兒舞一番次に女一番舞ひ了りて兒と女と立合之と舞ふ座する者十余人許ありとあり按するに上の女猿樂は所謂女にして猿樂を成せると論あるを共永享寛正其に皆な言語道斷希代れ由の文勢と以て考ぬるは其の新を饒ひし延明かにして從來の猿樂所作の樂態ある論を俟ふを曲舞は七十一番職人歌合に其圖も見えて白拍子お伯仲の者あるを上文猶や言語道斷奇妙の至りなどの文勢に據れは其立合聊色を珍く取なしつると是ゑ亦た明なり而して彼の猿樂曲舞の類從來の所作を附酌し此の一種の歌舞新奇よ遷りし事み明ならずや果して一種の歌好とありて彌々狠藝の態に遷り雜曲も惡むか如き所作となりしなられ於國か振興せんと云ふ慶長の度に至りて最も盛かなりといふべし

雜舞

曲舞は職人盡を見るに女なり後世大頭と稱するもの是にあり（或は大柏とも呼ふと云ふは誤なり）又た大頭幸若を二派とよとも云へり其始め何れ先頭なるや詳ならず又た古くは幸若舞とも云へり

あらゝぎ舞は續古事談に一條院御時相撲の拔手の日あらゝぎ舞と云ふ舞御覽じけると有り是れ藥師寺風俗なりと女姿にて初めは人の丈程よく漸々高くなりく一丈に及ひけりとぞ有り「あらゝぎ」は齋宮の忌詞の中に塔を「アラヽギ」と云ふより此舞の丈高きを塔に倣へしなり教訓抄に庶人三臺と云條は即右の「あらゝぎ」舞の事なり鷺足に乘る伎とみも信西入道これ傳來ると云は傳ぬ唐舞の圖の内よも丈高き怪き形のものあり仝物なるべし

延年舞は僧家の舞にて是も又た一種の物なり白拍子大頭なぞもその内にあり圓光大師傳文治四年九月後白河法皇妙法經奉納の爲め首楞嚴院に臨幸あり云々食にしく御裝束改めらるゝ此間衆徒庭上に群參して延年種々れ戯とほとこを云々となり又た著聞集太平記東鑑等にも見えたり其の何きの頃ふ始まりしか詳ならず此の舞を因緣舞と云ふは誤なり

萬歳　は元と千秋萬歳と云ふ新猿樂の中に千秋萬歳の酒禱とゝも三十二番職人歌合に千秋萬歳法師白き裝束して鳥冠を若し手に扇を持てまふ鼓うつ男は淺黄の衣をきて坐せり云々と見ゆ訓號國出に此流諸國にあり京に出つるは大和より出で中國は美濃より出て東へは三河よ出するなり云々和裝訓に神樂歌に千歳あり本は千歳ゝ謡ひ末は万歳と謡ふ此より出たるにやとも云へり又た一の說に今正月より三河の萬歳とて素袍烏帽子にて祝語を唱ふるもの大江定基より起ると云ひ万歳作太郎毎年東都に至り正月十一日勤仕す其初尾州白非郡長母寺開山無住其の詞を作りて愛知郡印內村の民に數へんとも云へり乘穏錄に無住國師尾州木ヶ崎に住せる時万歳の詞を作りて其僕有助と云ふものに數也今田地の名ある有助と云ふ處あり土人の說なりなどの諸說あり何れか是なるや猶考ふべし張州府志に無住國師所作樂備万歳樂使小奴德若福之以爲賀正と云るへは非なり（嬉遊笑覽）

獅子舞　は伊勢の吾妓川より出るを學び諸州に大神樂あり獅子舞は元と舞樂なるを田樂にとり神事に用ひたり大神樂といい伊勢にて太々神樂と云ふとは是はそ意によりて名付たる哉また代神樂とも書くは代祭り代垢離などの意にやあらむ昔々物語に七十年已前（享保十七年に斯く言ふは寛文年中の事ならん）大神宮依夜大神樂とて毎日江戸中俳徊しける有樣儀式正

しく先へ舞來て面に冠んりだる者直垂に白袴を着御幣と以て立其次に十四才ぺかりなる男子を美敷造り瓔珞を冠り長絹と着せ白袴と着中啓の扇を持右の手に鈴と持歩む三番に麻上下着たる男箱を持四番には衣の裝束着たる男其次に四ッ足付たる大長持に蓋を取て仰向にして置其上に獅子の頭となをし中に太鼓を置き一万度の御祓を眞中に立て御幣を立此長持四人かに六人にて舁く皆も皆な淨衣鳥帽子白きくゝり袴を着て囃子方左右に附笛太鼓小鼓拍子打合たる時右の瓔珞冠たる舞子神樂を舞次第に拍子急に諾る誠にしんとして感に堪ひたる斗りなり其内の興にとうけ人の笑のため太鼓打鳥帽子左右へ筋違く冠り時々撥と空に投上なとして是を大なるせうけとして見物の者興に入なり扨近年(享保なり)大神樂と云ふは人柄至極浮氣に見え大白衣大廣袖木綿布子巾着の帶をして大自墮落に大脇差とさし尤太鼓笛は吹とも唱歌小歌の節に合せて吹獅子頭は持て是をかぶりて様子好色は興に小歌狂言のみにて獅子を馬にして惡所通ひの狂言なとに移し若き男女の氣をそゝり立る様に道化下女下男に面白からするのみ訓蒙圖彙に今勸進の代神樂は舞手は乙女もなく只鼓大鼓なきたゝ兄たてゝ太鼓打のつらつら狂人のやうなるをもて嬉しがる然のみならぬ獅子なと立て扇の手をつかひ一節にて舞嚴珍しきと共なり閑崎女郎と云ふ獅子踊なれバ神慮は如何なと云へり然れ共寛永より明暦の頃は長持なとかつかせたる大神樂は見えぬ想に寛文延寳の頃始りしとぞ見えたり又たる事跡合考に伊勢派と尾張派との二派有りし由いへ共今は尾張派なと〻云へるなし

神事舞　十二座神樂なりもと神祭に猿樂を催すは大方は上み方の神社なり遠國には之と麗ふとぞ容易ならぬ但し神田明神は昔より神事能とて之れ有りしとぞ

小唄

小歌　榮華物語玉村菊の卷に川そひ柳風吹けバ動くと見れど根は強しと云ふ唄ものあり後世の投け節に似たり松の葉に哉する小歌の中に琉球組と云ふは永祿年中に琉球國より三線渡りし頃の組歌也え(?)に然か名けたるものにや小歌の殊お古兄者なり此に次きて鳥組、柳組、不祥組、飛彈組、忍組、浮世組、皆三線の組なり此の七曲を本曲と云へり琴は組は元と三線の組に倣ひて作りしものなり昔の小歌を集めたるものは松の葉、今綿、松の落葉、松竹梅、大幣、紙鳶、糸竹初心集、小歌總まくりなとも種々あり(三養雜記)

大踊舞は寶永正德の頃(一云享保と云)村間よ名を得たる俳優中村吉兵衛の作なり此の吉兵衛小唄の上手なるよし吉原徒然草にも見えたり吉原の古き小歌の今殘れるは僅に此の大踊舞のみなり然れ共人々種々に諸ひ傳へて正本無けされ文句の禘き〻ふ心得ぬと〻最も多かり然るを南畝翁の原富(原富は原代大夫とて三味線の名人なり)より傳へたりと云ふ大薩舞の歌節の喉(曲名)に見えたり。

隆達節　昔し隆達と云ふ法師の諸し小歌の昔し洽く流行して諸ひ傳へしと世に隆達節と云へり此隆達か傳へ堺鑑に高三隆達は元と日蓮宗堺津(堺)顯本寺の寺内に住す故有て還俗し出高三氏は家に生て藥種を商ふ年を經て小歌の節と一流諸ひ出せしより世俗隆達節とて諸ひ賞翫すとあり又攝陽群談國華万葉記にも此は僧か事見えたり

弄齋節　昔々物語に隆達は事を記して次に云其後百二三十年作所能齋と云ふ遊ひ坊主出來たり是も隆達を覺えて流行歌と唄ひ作る又格別に流行し或る公家衆聞給ひ殊の外感し給ひ歌の章雅文字は凡三十一文字なり是に節と付て諸ふへ歌と云も尤もなり此の外は唄へ歌と云ふへかりすこ弄齋を褒美し給ぬ云々と行れ共是は妄説なり弄齋と云へる歌うたひの事未た聞つおらさいへ療に病の名也ラウサイ流行し事は見聞集に今ラウサイと流行り昔人煩へり去程に醫者達此の時病を治しすがらにせんと術を盡し反藥をと與ふさに雖治る事難しよ醫者にもも非る老人中されける此の煩ひの起りと伺ぬに風邪寒冷よりも出る心より起る病なり然る間此病をも心氣と名付く藥よては治し難し唯己か心を轉し變す可きなりと有り又は戀病のとも云へり

長唄は貞享の頃江戸淺利檢校佐山檢校京朝妻勾當など引出すと云はれは歌舞伎か也るに非ず口説は長歌に非ず松の葉端歌の内ふクドキにも元と平家曲節は名之舞なきにも口説あり林雪樣或は輪舌と云ふ皆す歌は一節切に全し糸竹初心集大幣よも林雪樣を擬ゐ諦に云ふりんせつと云ふは林質なり集木の賢の落る樣な彈方也え斯く云ふなりと云々林雪一お亂とも云ふ

投節　貞享元祿の頃京師より流行して三都に行はる寶永五年印本男女色競男に投節は境の隆達其名高し章歌は箕山か作り雅ひるよしいへ共往古より無に非す邪曲にも此有り逍遙院御歌に

おもふとおけふ一船によふたふなり
めでたや松の下にむれゐて

など又た紀逸か雜話抄にも光廣卿御作自作の投節眺てありたり

𨛗節　投節は古名なる山鏤翁云へり

雛節　大坂新町に行はる万治年中新町に雛と云へる遊女美

盛わして一派の小唄を謡ひ出しけるより此の里の名物となりけるか元祿寶永の頃盛に行はれ正徳の頃に至りて衰えしよし原は繼節江戸吉原は名物にして何れも頃盛に行はれしや京、島原は投節大坂新町今の新地かの籬節と合せて音曲の三名物と号せしよし

滑り　万治寛文の頃より元祿寶永の頃にいたる流行言葉にして且つ　唄にも作りしなり

土手節　洞房語園に尾高和酔翁と云ふ隠士あり寛文の頃鶴組吉屋組等れ男達の唄ひ流行せし土手節と云ふ小唄は此翁の作なりと云ふ

間の山節　一代女、神風や伊勢の古市中の地獄と云所のゆさん宿に身をなして所うちとく間は山節わさましや往來は人に名を流もと何れなる諷ふも全音にしておかし云々伊勢両宮の間なれは間の山と云ふ今も浄瑠璃に加はりて間の山と云ふ音節は發れり又た此の節は伊勢音頭の始めなり伊勢名所圖會に古市は昔の市場あり古市も間の山の内おく間の山節と謡ひし者あるに物衰れある節なる故よいつれ頭よりか遷りて川崎音頭流行し退を伊勢音頭ト稱し都部共に華巷の唄ひ物となれり云々

さゝんざ　慶長の頃さゝんざと云ふ歌流行せり竹齋物語に石村撿校參らして歌の調子を上おけり情は今の思の種よ雨のふるよにさがぬれてこそのたそともしやるはよそ心さかあさかづきとり出し度々巾てはつかしけれと又さゝンツなど謡ふ云々と見たり

加賀節　万治寛文の頃行はる昔々物語に云ふ六七十年程己前（万治寛文のころなり）稱宜町の狂言座勘三郎座の役者共の中よ多門庄左工門出來嶋小ざらし、花井才三郎玉村吉彌玉川仙之丞山川内記玉川主膳などゝ云ふ名高き美男子拍子きゝ是聲よき物なり是れら寄合せて加賀節と云ふ歌を謡ひ出す諸人殊の外賞翫し大おに流行せり（浄瑠璃にも亦た加賀節あり此れ京都宇治加賀掾の山節なり）

柴垣節　明暦の頃盛に行はれたり然して此は歌ふれゝに非ず二人り立並んて手を拍ち胸を打つて踊る故に柴垣を打つ共云ひし東海道名所記比丘尼ゝ條に次に柴垣とやらん原とは山は牛奴どもの踊歌なるを比丘尼節にのせらうたふと云へは専ら賤き者の歌ひし小唄にてありしある可し貞享の頃漸く廢れたり

小室節　其始并に名義ともに知る可らず今も諸侯御入府の節は御馬前に立て謡ふとのや其曲節を傳ふる家今も武州豊島郡三河島に殘りてあり三河島に殘る物は三河より來る人の子孫なりと云ふ

道念節　京に道念山三郎と云ふ與惣の音頭あり貞享の頃盆師口説と云ふ唄を謡ひ出したり此の節踊の拍子に好く合ひたる間なれは今以ても好しすゝよし清涼お世事談に言へり

四つ竹節　人倫訓蒙圖彙に云ふ長崎に一平次と云ふ者始め行德なる者よてわりしが藝は身を助けし籠のうづらさやらんおて四つ竹故に大坂よ上り芝居張られたりとわア西鶴か男色大鑑には承應の頃長崎より一平次來り四つ竹と云ふ事を始く手拍子打犬うつ童までもてはやしけるよし云へり今も四つ竹の小唄とて殘れり（盤山類聚）

古今節・元祿の頃古今新左工門（本性は村山と云ふ由）と云る歌舞妓役者謡ひ始めゝ由世事談よ云へり

潮來節　常州行方郡潮來村（潮來は板久と書す）に行はれし山節よして當時諸國よ流行せし故よ潮來節と稱し新山を綴れど多くは鄙陋にして記すよ耐へぞ此の曲節の始り未た詳ならず

小六節　三味線一節切筝にも合せて謡ひしなり糸竹初心集に小唄あり其始め詳ならぞ

總括

已上は我邦古來よりの歌舞を雅俗を問はず蒐集せし物なれ其是にて盡せりと云ふには非す或は暫時の間流行して其跡を絶つも有り或は一地方にのみ行はれて其名のみ殘り記傳の詳ならざる者等は他日充分の時日を以て一書と纏せんとす又古來より踏歌の流を汲みて踊りと稱する者あまた是れよは少しく說わればは茲よ暫く其沿革を省く

第一部終り

寄書

つれ〴〵

大口

（五）五分〳〵

我未た（小説）とハ如何なるものかとの觀念もなかりし折より、其好きの好きにて且夕其間に依さり。此年迄大きくなりぬ。此間初の程ハ偏に古きものを嫌ひ、専ら新しきものと好みけきハ、古判と言へハ見たくもなしと一概に跳ね退け。此そ一番なるを専ら新板に目を附くせしか、さる日不圖せしとより古判一巻と讀ミ、中々侮られすと、其より古判無性に讀ミたくあり。讀めハ讀むに從ひ愈々其妙手なるに驚き、古作者えらく思ハき。新板まづくして、其作家皆古作者の糟粕を舐るからと初の思を裏返り。古判の取るへき値打を覺えぬ。さりなから今迄讀ミ詰めにせ一新板、此をまるで捨てんも殘惜しけれハと、思ひ出せ一折々讀ミけるに、遂に近き世の事にハ此でなくバと深更てもあくれバ、其と思ひ返して、此度ハ古判'新板各々程能く讀ミあハ得益々多かりなんと、此よハ双方其に其捨て難き所をハ悟りける。總て片寄ると言ふとハ歹きものそも誰も常に知れるとなから、廣き世の中にハ此境に向ふ人、迷ふ人もあらんかとて、わが試みし所と取て明言しぬ。（三月十二日）

（六）罪なきからも慰まきてハ操立たぬか

明治女學校の倫理問題にハ折々面白きもの現ハるゝと見え。發にハ（定九郎の與一兵衛を殺すと）云々とありしが、間もなく又（一少女途まて惡人に遭ふ傍よ人なし將に辱を受けんとす少女ハ如何に爲そへきや但し右の少女ハ其時七首を懐中し居たり）とありしと聞きぬ。（其よ女學雜誌にて）此時我感せしとわりて其儀を物せしが、后貴女之友の（あゝ明治女學校の教師達ハ何か故よ此の如きとを學問的に研究し置かねハ不都合なりとの考を出たされしか道理と知らぬにも程かわる）と言ひしを聞き。實に道理と思ひて彼稿と反古にせしが、又今日着きける婦女雜誌三号を見るよ（明治女學校倫理科問題ハ答案評佐藤むくら）其説に（女子の德義上最も守ふへき操行を全ふせんか爲にハ惡人を殺すも差支なし）とありて、全くわが説と同じきハ同じきなれど、倘ほ其與一少女、惡人を殺し得さる時の其身の振り方――を究めざりしが、眞事歯痒く。彼文反古を思ひ起こしゝ儘、例の癖とて言ひたくなりて止まねハ、貴女之友等の識ハ取てとして、今其幾分を綴らん。即ち若し其少女、惡人よ出遭ひ、脱れん手段ハ百計百第ハ恐く試み難くせぞ、皆々常て外ハ。今ハ七首も奪ハき、無念や、慰み物にされんよりハと、遂に自ら舌を噛み切りて死すか、手づから吭笛を掻き去るか。（我ハ已れが意よて身くねとて惡人に殺さるゝと見てもよし）兎よ角死に、就きて操を全くせしと仮定し置き。愛に惡人ハ其惡を以て遂に少女の息の絶えけるも干はで、其死休よ向ひて其慾を果たしけるせん。此少女ハ死して后なれバとて一旦惡人の肌を觸れしとなれハ、矢張操行を欠かれしものか。但しハ死して后あれハ辱を受けしとハ言ハれぬか。此疑を晴らしたまふ人あらハ可嬉。（十三日）

（七）文作りの事

我に、今茲年強の十三にて來年ハ小學卒業すべき一人のあり、我嘗て呼び付けて曰く。聞け！　作文の本とてハ一要らぬ物なり。只文と精出して多く讀め！　此兄濫書乏しれど汝の嗜好を滿たすにハ何は餘分あれど。さあらバ必ず々立派に書けるやうよなるものなり。初心の内に作文書用ゐてハ却りて文思偏局に踊り、筆頭何時迄も暢ひ難く、よ此兄の如き下手にならん。汝折々作文の本を貸せと言ど、此兄の許さぬも此故なりき。教えけるとありしが、后深くひて已が御遊ひある所を悟りけれハ、更よ舍弟を呼ひて曰く發の兄が言葉ハ大早計なりき。矢張初心の程ハ大人敷く縦則なるとを見做れず、從來の作文書に據りて、早く此筋を心得るに如かず。巳に其節徑を覺えなバ、其時ハ作文も他に施して可なり。即ち此時より讀むへきもの多らこそ善けれと。此聞きて舍弟わが顔を熟と詠めて曰く。兄我を嬲られけり。今より我一生作文書ハねだるまじく、日兄様の御文でも習ひ申さんと吹きぬ。（十七日）

（八）狂歌娘

此娘百姓の貧しき生活に生ひ立ち。教とてハ受けしとなれど、天才なりて世の狂歌と言へる道に長け。其詠む所々人々を驚かしけり。さる日此道に志ある人、此附を傳へ聞き、態々勢の員弁の里に此娘を訪ひ。狂歌詠ませんとすど、何時にあく默りて物も言ハねバ、傍なる母さへもどかしく。共に狂歌早く詠みいでよと勸めければ、漸く唇を開き

恥づかしやまだ齒を染めぬおよめ〳〵の
きやう〳〵と田舍娘を

と應へし時ハ年十一二。今頃は此娘嫁入り盛ならんとさ老婆の話。（廿七日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

愛讀諸孃の御勸ゝ從ひ
次号即ち第八十三号以後のいらつめゟは從來の規撲を廢し
淑女の文藝を主とした雜誌とし
いやしくも淑女の文藝に關する事は細大洩らさせ
特ゝ韻文及び文章を專門として掲げる事ゝしました
就而從來の毎月一回（廿日發兌）までを月二回發兌を改め
但し定價及び其他の規則は從前と同じです

發兌本社　神田平永町　成美社

いらつめ古本

いらつめ

第十三号から第廿七号迄取揃へて
非常廉價金九拾錢（郵税なし）

第廿八號から第七十六號迄
雜誌で いづれも疵の無いもの、汚損脱丁など有りません
取揃へて非常廉價金九拾五錢（郵税なし）

（遞信省認可）